

平賀源内と東都薬品会

——本草学のネットワーク——

はじめに

平賀源内（一七二八～七九）はさまざまな顔をもつ人物であるが、ここでは本草学者としての彼を紹介したい。

源内は享保十三（一七二八）年、讃岐国志度浦（香川県さぬき市）に生まれ、幼いころから本草や儒学などの学問を修めた。「本草学」とは、薬物学を中心とした、あらゆる自然物を生活に役立てることを目的にする学問である。宝暦六（一七五六）年に高松藩の許しを得て江戸の田村元雄（藍水）に師事し、初めて、薬品会の開催に携わる。「薬品会」とは当初、医師たちが薬となる物品や植物をもちより、知識の共有を計った会のこと、薬物会・物類会ともいった。田村一門は江戸で、宝暦七年から十年まで毎年、薬品会を開催し、それは熊本や上方でも行われた（後掲「薬品会年表」）。同十二年の東都薬品会は源内が主催したが、そこでの展示物千三百種に加え、それまで田村一門が行った薬品会で集まった出品物とともに総計二千種の薬品（物産）を紹介した『物類品騰』を宝暦十三年に出版した（藍水は序文を

寄せるとともに、鑑定を務める^①）。周知のように、これが源内の本草学者としての大きな功績とされている。

ところで東都薬品会は、引札を配って全国から出品者を募るところなのだが、どのようにして、これらの出品物は集められたのだろうか。

『物類品騰』をはじめとする薬品会の記録を見ていくと、薬品会への出品者・協力者の輪が、どのように広がっていきかが見え、じつに興味深い。本草学者や医者はもちろん、植木職人や一般の庶民、地域の学者なども加わり、薬品会の裾野が意外にも広いことが分かる。

小論では、宝暦七（一七五七）年、源内が江戸にやってきて間もない頃、初めて開かれた薬品会、その後開かれ、初めて記録本が発行された大坂と京都の会、そして源内主催の東都薬品会を取り上げ、本草学に関わるネットワークが、どのように構築されていたかを検討する。

一 薬品会のはじまり

宝暦七（一七五七）年七月、田村元雄（藍水）が江戸の湯島で薬品

薬品会年表

地域	年号	西暦	月日	名称・会場・会主	書物
江戸	宝暦7	1757	7月	田村藍水薬草会 於湯島	会薬譜・物類品隣
	8	1758	4月	田村藍水薬草会 於神田	〃
	9	1759	8/18	平賀源内薬草会 於湯島	〃
	10	1760		松田長元薬品会 於市ヶ谷	(物類品隣凡例)
	12	1762	閏4/10	東都薬品会 於湯島 平賀源内	物類品隣
	明和1	1764		平賀源内物産展 於湯島	
熊本	宝暦8	1758		鬮薬会 於再春館	
大坂	宝暦10	1760	4/15	戸田旭山薬物会 於浄安寺	文会録
	11	1761		戸田旭山物産会	浪華物産会目録(国書解題による)
	12	1762	3/8	戸田旭山鬮薬会 於浄安寺	
	明和1	1764	5/23	戸田旭山鬮薬会 於浄安寺	
京都	宝暦11	1761	4/15	豊田養慶薬品会 於東山雙林寺	楮鞭餘録
	13	1762	4/15	鑑古堂産物会 於円山芙蓉楼	

(磯野直秀『日本博物誌年表』の「薬品会年表」より一部抜粋)

会を開催した。田村藍水(一七一八〜一七七六)、本姓坂上、名は登、通称元雄、藍水と号し、朝鮮人參の研究で知られる。藍水は元文二(一七三七)年、幕命を受けて朝鮮人參の栽培を開始している。源内が入門した頃は、各地へ採薬に赴き、諸地方の天産物を熟知していた。町医であるが、幕命も受ける本草家だった。その後、宝暦十三年に官医に召し上げられ、朝鮮種薬用人參の栽培と管理を任されている。

『物類品隣』序文で藍水が「都下二物産家多シト雖モ、余ヲ以テ嚆矢トナス」と述べていることから、彼の物産家としての自負がわかる。同時に、「同志中平賀氏先ツ唱エ」ともあり、薬品会を提唱した源内の功績も認めている。江戸での薬品会は、宝暦七年の第一回目から同八、九年と三回まで連続して行なわれたが、その出品者と出品物をまとめた『会薬譜』²⁾によると、第一回薬品会の出品者は二名、出品数一八〇品で、そのうち主催の元雄が一〇〇品を、残りを他の出品者が提供している。

主催者が出品したものを「主品」、客が出品したものを「客品」と呼び、主品一〇〇種は、三回とも共通している。翌八年四月の第二回目には、出品者は三四名、出品数二二一品と、一回目よりも多くの参加がみてとれる。さらに翌々宝暦九年、平賀国倫(源内)の主催で開かれた第三回薬品会には、出品者三四名、出品数二二三品で、主品の半分を師の元雄に出してもらっているものの、弟子源内が頭角をあらわしてきたことがわかる(表1)。

江戸での三回の薬品会について、どのような人々が出品していたのだろうか。

表1 『会葉譜』 鑑定田村藍水 編平賀国倫 同校田村元長 古河章輔 中川純亭

宝暦七年 会主田村藍水

田村 元雄	東都	100
藤本 立泉	官医	3
岡田 養仙	官医	3
岡 了伯	官医	3
宮村 永隆	官医	4
後藤 梨春		5
福山 舜調		3
松田 長元		3
大口 玄周		6
古河 章輔		3
中川 純亭		3
田村 元長		3
髭髯斎 樹母		10
熊井 宗寿		6
小貫 玄昌		2
松坂屋 六兵衛		2
芸花屋 宇平次		4
芸花家 五郎吉		4
芸花家 義右衛門		7
海老屋 辨蔵		2
蓋屋 傳兵衛		2

宝暦八年 会主田村藍水

田村 元雄		100
橘 隆庵	官医	2
藤本 立泉	官医	5
岡田 養仙	(官医)	7
岡 了伯	(官医)	11
宮村 永隆	(官医)	3
後藤 梨春		3

福山 舜調		4
松田 長元		3
大口 玄周		6
古河 章輔		4
蟹江(田村) 元長		4
澤 東宿		4
髭髯斎 樹母		2
白河 宗寿		6
松田 新蔵		3
中嶋 三智		5
小林 文左衛門		2
中野 東節		2
片山 文庵		2
髭嶋藤■		3
熊井 宗寿		5
青柳 仙安		6
小貫 玄昌		2
福山 喜安		2
志水 秀安		4
樋口 仙安		3
河毛 松運		2
田中 元旭		3
今井 元安		3
小貫 玄秀		3
芸花家 義右衛門		2
芸花家 林蔵		6
平賀 国倫		5

宝暦九年 会主平賀国倫

田村 元雄		50
平賀 国倫		50

岡田 養仙	官医	3
宮村 永隆	官医	5
山田 富永	官医	8
後藤 梨春		1
福山 舜調		3
松田 長元		3
大口 玄周		3
古河 章輔		5
中川 純亭		7
田村 元長		9
澤 東宿		3
海治 文四郎		5
髭髯斎 樹母		4
谷村 元眠		2
圖師 長益		1
堀 宗本		1
堀 宗興		1
黒川 儀助		1
大津 傳十郎		1
青山 仲庵		4
福山 喜安		3
河毛 松運		4
樋口 仙安		5
志水 秀安		2
鈴木 見琢		3
大平 宗本		3
河野 亮達		3
中久喜 玄常		3
白石 原進		4
松井 半兵衛		2
中村屋 伊兵衛		5

第一に、田村藍水の一門である。源内はもちろん、後藤梨春・福山舜調・松田長元・大口玄周・古河章輔・中川純亭(淳庵)・田村元長(西湖)などで、田村一門に連なる人々である。

後藤梨春(一六九七〜一七七二)：名光生、字梨春、号梧陰庵。田村一門の古参で、『物類品隲』に序文を寄せてくれた江戸の町医。オランダの地理や物産を紹介した『紅毛談』を著した。この本で初めてエレキテルを図入りで紹介したが、アルファベットの入りだったため発禁になってしまった。晩年に幕府医学館の躰寿館都講(教頭)となる。

中川淳庵(一七三九〜八六)：若狭藩小浜侯侍医仙安の長男で江戸に生まれる。初名は純安・純亭、名は玄鱗・鱗。字は攀脚。本草好きで、平賀源内編『会葉譜』・『物類品隲』を校閲し、明和元年(一七六四)、火浣布製造を指導。明和七年家督を相続する。蘭学にも興味を持ち、長崎屋に通い、知識を得た。杉田玄白、前野良沢とともに『解体新書』を翻訳し、安永三年同書を刊行。同七年若狭藩小浜奥医師となる。

田村西湖（元長）（一七三九〜九三）：藍水の長男で淳庵と同年。西湖・善之ともいった。『物類品隨』には淳庵とともに校訂者に名を連ねている。後に父の後を継いで幕吏となり、寛政二年には江戸城奥詰御番医師次席になった。

第二に、幕府医官などの幕府関係者がいる。『会薬譜』には岡田養仙・藤本立泉・岡了伯・宮村永隆・橋隆庵・山田富水の六名が、官医として登載されており、また第三回目に出ている松井半兵衛は、幕府採薬使の松井重康ではないかと思われる。幕府の政策として本草学の普及が取り組まれていたことと、人參研究の第一人者といわれた藍水の影響力が推測できる。

岡田養仙・藤本立泉：『蘭字事始』によれば、玄白らが腑分けの見物をするときまで、七・八回、腑分けをしていた人物とある。

松井重康（半兵衛）：阿部照任の門人で、享保年間、植村政勝らと諸国を巡歴した。

そして第三に、屋号持ちの人々があげられる。芸花屋の宇平次・五郎吉・儀右衛門・林蔵、松坂屋六兵衛、蓋屋傳兵衛、海老屋辨蔵、中村屋伊兵衛など、明らかに町人身分のものである。芸花屋とは植木屋を意味し、松坂屋・中村屋は江戸の薬種商であった。初回到六人いた屋号持ちの出品は、会が進むごとに三人、一人とへっていくことから、当初彼らが商っている薬種品を提供してもらっていたものが、会が盛況になるにつれ、参加者と出品数も増えたので減少していったとみていいのではないか、と思われる。

薬品会の評判が広がるにつれ、宝暦八（一七五八）年には熊本の新春館において鬪薬会、同十（一七六〇）年には大坂浄安寺で戸田旭山主催の薬物会、同十一（一七六一）年には京都東山雙林寺で豊田養慶主催の薬品会が開催されるなど、江戸以外の地域でも薬品会が催されるようになった。

二 京坂の薬品会

田村元雄が江戸で薬品会を開催してから三年後の宝暦十（一七六〇）年四月十五日、大坂でも薬物会が開かれ、その一月後に、薬品会の記録本としては初めてとなる『旭山先生文会録』（浪華書舗文海堂・抱玉軒蔵版）が発行された（表2）。

主催の戸田旭山（一六九六〜一七六九）は、名を齋いづみ、通称齋宮いづみ、旭山・無悶子と号した。備前岡山藩士鈴木氏の出身で、京都で学んだのち大坂鰻谷で開院した。本草を津島恒之進（如庵）に師事した。源内が藍水に師事する前、大坂で世話になった町医である。『文会録』に源内も跋文を寄せているが、そのなかで「旭山先生」と書いているから師弟関係にあったのだろう。

宝暦十年三月に出された「薬物会精啓」という回覧状（『文会録』所載）には、「宝暦丁丑・戊寅兩年、東都田村藍水子始テ薬物ヲ以テ友ヲ会スル」と江戸の物産会のことに触れ、三回の会で出品数が六百有余に至ったことに「嗚呼盛ナル哉」「安ソ能此ノ盛会ヲ得ンヤ」とその盛況ぶりに感激したことを伝えている。それと同時に、

「浪華は東都の隆盛に並はずとも本邦で二、三の大都会であり、

表2 『文会録』 宝暦十年 戸田旭山

戸田 旭山		50
山瀬 次右衛門	紀州和歌山	2
某氏	備前岡山	1
大山 正因	大坂	1
田村 元雄	東都	3
田村 元長	東都 元雄男	1
藤本 立仙	官医	3
岡田 養仙	官医	1
岡 了伯	官医	2
宮村 永隆	官医	1
志水 周安	水戸候侍医	1
後藤 黎春	東都	1
松田 長元	東都	2
福山 舜調	東都	1
大口 玄周	高田候侍医	1
古河 章甫	東都	1
中川 純亭	小濱候侍医	2
澤 東宿	群上候侍医	1
青柳 仙安	大多喜候侍医	1
福山 喜菴	東都	1
樋口 仙安	姫路候侍医	2
石川 玄丈	東都	2
大平 宗本	姫路候侍医	2
河野 亮達	東都	2
中久喜 玄常	宮津候侍医	1
平賀 源内	讃州人寓學干聖堂 高松候賜學資月俸數口	6

右計二十二 東都社中物品凡三十七種足

宮田 七郎右衛門	紀州和歌山	1
志摩 重蔵	紀州和歌山	2
赤澤 恭節	大坂	1
藤木 文菴	大坂	1
介中 拙斎	摂州今津	2
藤田 七兵衛	南都	2
井上 平五郎	南都	1
尾西 伊兵衛	南都	1
和角 養軒	南都	2
白井 道順	大坂	2
藤田 養菴	播州明石	8
直海 元周	平安	4
植木屋 政右衛門	平安	3
三木 恒斎	紀候侍医	3
逸見 喜右衛門	越中州北野村	2
村上 周格	藝候侍医	2
植木屋 裕十郎	平安	1
鶴橋主人	平安	2
松下 金六	平安	2
藤木 立股	高松候侍医	2
杉原 養倫	高松候侍医	2
玉越 勝運	高松候侍医	2
片岡 志摩	八幡	3
長尾 謙定	高松候侍医	2

右計十三人京師社中物品三十二種足

矢木 俊越	大坂	1
武中 周蔵	大坂	1
豊嶋 杏伯	大坂	1
古林 杏節	大坂	2
久保津 敬元	大坂	1
古林 正甫	大坂	1
山田 順菴	大坂	1
山田 正因	大坂	3
中村 東圭	大坂	2
森 立軒	大坂	2
森 衆充	大坂	1
林 隆菴	大坂	2
小芝 新助	大坂	2
中村 藤兵衛	大坂	2
木下 宇兵衛	大坂	2
森野 賽郭翁	和州松山	20
松井 吉助	高津藝種家	2
渡部 主税	天満	5
重岡 見昌	河州中野村	2
宮城 玄忠	大坂	1
安倉 茂左衛門	南都	2
武田 三迪	大坂	1
都賀 六蔵	天満	3
三木 東洲	大坂	1
入江 只彦	讃州高松	2
久保 桑閑	讃州古高松	2
戸村 宇尤衛門	河州八尾	1
沙田 八右衛門	大坂	1
寺嶋 樂山	河州上嶋	3
今井田 三右衛門	濃州須賀	2
水室 左近	尾州津島	2
木村 吉右衛門 (兼葭堂)	大坂	2
田中 清右衛門	河州	2
坂上 伊兵衛	伊丹	1
上嶋 無動	伊丹	2
吉田 與二兵衛	河州柏原	1
内田 七右衛門	和州	3
行松 春菴	大坂	1
坂戸 孫三郎	河州	2
桂川 一馬	大坂	1
丹波屋 伊兵衛	天満	1
松屋 甚兵衛	大坂	1
植木屋 莊右衛門	天満	1
富山 得水	讃州陶村	2
三好 喜右衛門	讃州陶村	2
植木屋 佐兵衛	天満	2
橋本 仙質	紀州湯浅	1
岡 桐茂	大坂	1
池田 玄丈	高松候薬園宰	4
柴野氏	讃州高松	2
柳 隆元	長崎唐館医	2

儒医百工の数も負けてはいない。藍水子の鑑定に及ばなくても私も数十年医者を続け、薬園も持っている。皆で薬草を持ち寄り、明らかにしようではないか」

と江戸の田村一門への対抗心から、薬物会を開催したと語っている。^③

大坂の薬物会は、熊本について行われ、しかも初めて、記録本が上梓された点で興味深い。第一回から三回までの記録をまとめた源内編の『会葉譜』が、校正されてはいたものの未発行であったことから考へれば、『文会録』が薬物会の翌月に発行されたことは画期的である。『文会録』によれば、出品者は一〇一人、出品数は一九一種二〇八品に及び、二二丁の挿絵がつけられている。出品者と物品の記載順は到着順で、親切なことに、出品者にはそれぞれその所属または出身地が記載されており、薬物会に連なるネットワークがうかがえる。

『文会録』から作成した出品者(表2)を見ていくと、まず目を引くのが東都社中の二二人と京師社中一三人がまとまって書かれている点である。東都社中の二二人は、田村元雄・元長親子を筆頭に、江戸の会でも登場する人物が二一名おり、元雄と源内が旭山に全面的に協力したことがわかる。それと同時に『文会録』から、東都の人物の所属が明らかになっている点が興味深い。志水周安(水戸侯侍医)、大口玄周(高田侯侍医)、中川純亭(小浜侯侍医)、澤東宿(群上侯侍医)、青柳仙安(大多喜侯侍医)、樋口仙安(姫路侯侍医)、大平宗本(姫路侯侍医)、中久喜玄常(宮津侯侍医)のように、八人が諸藩の江戸詰め藩医である。

一方、京師社中は、素直に見るならば京都の直海元周を筆頭として長尾謙定までである。直海元周は京都の本草家で、名龍、号衛斎、

字元周という。

直海元周：生没年不明、学者 儒者医家商売浮屠両替町二条下る丁『明和五年版平安人物志』とある。直海は『広大和本草』を著しているが、誤りが多く、同時代の人からも非難を浴び、源内も『物類品隲』で訂正をいれている。

直海元周は、大坂の薬物会では旭山とともに品物の鑑定をしている。旭山とも親しく、この会の京師社中の中心であることは間違いない。その中で高松藩関係者が四名と京師社中の三分の一近くを占めているのが注目される。高松藩の医師などが、京都に遊学していたのである。これらの社中を除けば所属が書かれているのは池田玄丈(高松侯薬園宰)、柳隆元(長崎唐館医)くらいで、多くの出品者が町人などであったらうと推測できる。

本草家としては、和州松山の森野賽郭翁(藤助)、和歌山の山瀬次右衛門などがあげられる。

森野藤助(賽郭)(一六九〇～一七六七)：葛粉製造 植村政勝の弟子。享保十四年、採葉使植村政勝の案内を勤め、同年幕府より薬草(朝鮮人參・甘草・東京肉桂・烏臼木・天台烏藥・牡荊樹・山菜莢)の下付を受けて自宅裏山に薬園を開いた。同二十年、苗字帯刀を許された。著作に『松山本草』がある。

高津芸種家の松井吉助は植木屋で、彼に因む吉助牡丹は『撰津名所図会』にも紹介されている。

その他の出品者のすべてについて知る術は少ないが、さらに手がか

りを得てみたい。まず『浪華郷友録』（安永四年版）（大坂最初の人名録で分野別の学問の先生を探すことができる）を参照すると、次の六名が掲載されている。

木村吉右衛門（大坂聞人画家作印家、木孔恭字世蕭号）、大坂の名族で代々当主は見宜を名乗る古林正甫、町医であったが後に戯作者へと転身した都賀六蔵（天満医家書家都庭鍾、字公聲、号大江漁人、又号辛夷館）、天満社神主の渡部主税（菅原吉賢、号不棄齋影馴亭、花鈴以好聞）、伏見の儒家行松春菴行（松續緒、字子機、号濟南）、木屋町の医師久保津敬元（窪欣、字敬元、号龍柯主人）。

木村兼葭堂日記（『兼葭堂日記完本』）を参照すると、小芝新助、豊嶋杏伯、林隆庵、宮城玄忠（宮崎元沖）、森野藤介、植木屋庄右衛門、渡辺主税、植木屋佐兵衛、坂戸孫三郎、鶴橋、山瀬次右衛門、柴野、木内小半（石亭）、柳隆元らの名前を見つけることができる。

全体をみると、高松関係者が出品者の一割を占める。源内も含め、高松侯侍医の藤木立殷・杉原養倫・玉越勝運・長尾謙定、高松侯薬園宰池田玄丈ら藩士が六名。源内の旧知の蘭医久保桑閑と陶村の三好喜右衛門。さらに柴野氏は栗山のことか、それとも国許にいる家族であったかもしれない。旭山主催の薬物会に、高松藩大坂蔵屋敷などの関与が推測される。さらに江戸の薬品会に比べると、町人が多く参加しているのも注目される。

もうひとつ、京都での物産会をあげておきたい。松岡恕庵の門人甲賀敬元の弟子の豊田養慶が、宝暦十一年、京都東山真葛ヶ原雙林寺において主催した薬品会である。出品者三五人、出品数一三一種と江戸・大坂に比べて少ないが、『緒鞭餘録』（表3）にまとめられている。

表3 『緒鞭餘録』 甲賀敬元鑑定 豊田養慶編輯 平安 文品堂梓

南部 自安	平安	4	和角 養軒	南都	1
薬舗	平安	4	井上 平五郎	南都	2
長尾 謙定	高松医官	2	安倉 茂左衛門	南都	1
薬舗	平安	3	和田 春庵	平安	6
助五郎	平安芸種家	2	吉田 市郎兵衛	平安	5
青木 謙益	平安	5	薬店	平安	2
玉養 道意	阿州医官	2	宮田 正允	平安	11
乾来庵	阿州医官	1	廣澤 仁左衛門	平安	6
堀 玄珪	阿州医官	3	鑑古堂	平安	17
熊谷 玄且	巖邑医官	2	益井 市郎兵衛	平安	3
朝枝 桃軒	巖邑医官	2	藤木 泰伸	讃州高松	2
都野 健順	巖邑医官	2	赤澤 左膳	讃州高松	1
藤兼 寿軒	周防岩国	2	山本氏	平安	1
富勢氏	平安	2	青木氏	平安	2
西澤 源蔵	江州	3	直海 元周	平安	3
平野 慎蔵	平安	1	逸見 喜右衛門	越中北野村	1
渡辺 孝淳	洛東	2	豊田 養慶		23
藤田 七兵衛	南都	2			

豊田養慶子禎は周防国岩国藩医で、京都に上って本草学を修めた。出品者は開催地京都から一八人、養慶の出身である岩国藩医が三人、四国の阿波藩医三人、高松藩医一人など医官関係が七名。その他は、戸田旭山の会でも見かけた南都四人と高松二人、越中・近江・岩国がそれぞれ一人ずつで、近畿・四国・中国地方の七ヶ国から出品という内訳である。印象としては京都の近しい一門のみで開催したという感

じて、大坂の旭山の薬物会のように広範な参加を呼びかけたようにはみえない。

京都の会に見え、旭山の会に見えないものは豊田の一門に属し、京都の会と大坂の会で重複している南都の四人は、直海の一門に属するのではないかと考えられる。

ネットワークの集大成としての東都薬品会

——むすびにかえて——

宝暦十二年閏四月、江戸湯島天神前の京屋九兵衛方で行われたのが、第五回目の東都薬品会である。残念ながらこの会の記録はないが、『物類品隲』凡例によれば会期は一日ながら、全国各地三〇カ国から凡そ一三〇〇種が集まったとされる。さぞかし盛大なものであっただろう。

この東都薬品会と、それまで田村一門が開催した前後四回の薬品会の記録書が、『物類品隲』（全六巻）であるが、その発行が、本草学者鳩溪平賀先生のもっとも大きな事業として知られている。この東都薬品会は全国に取次所を設け、輸送費用を主催者持ちで物品を集めたこと、前年に引札を配布して不特定多数の参加を募ったことなどが大きな特徴である。しかもこの会は今までとは違い、物だけの出品が可能であった。つまりこれまででは、出品者が原則、会場に足を運んで出品しなくてはならなかったが、それを無くしたことで多くの品物を出品することができたのである。

そのなかで一番興味を引くのが、この引札に挙げられた全国各地一

表4 東都薬品会引札

○大坂までは戸田齋先生より諸方産物取集相送り候約束に御座候
○京都までは直海元周老并門人衆よりも産物取揃差越候筈に御座候

遠国より参候産物請取所

江戸	本町四丁目	薬し	中村屋伊兵衛
京	八幡町柳馬場東エ入北側		千切屋次郎兵衛
	二条新地		薬草屋勘兵衛
大坂	今橋道尼崎一丁目	本朝人参座	天王寺屋勘兵衛
	天満天神裏門前	芸種家	豊後屋喜右衛門

諸国産物取次所

長崎	大村町	齊藤丈右衛門	讃岐	古高松	久保桑閑
同	江戸町	山本利源次	同	陶村	三好喜右衛門
南都		藤田七兵衛	越中	北野村	逸見喜右衛
大和	宇陀松山	森野藤助	信濃	善光寺下町	青山仲庵
近江	山田	木内小半	遠江	金谷驛	本目隆庵
摂津	伊丹	武田三迪	同	同所十五新町	河合小才次
河内	中野村	重岡見昌	駿河	沼津驛川郭	清野玄一
播磨	明石	藤田養菴	伊豆	北条四日町	鎮惣七
紀伊	若山東田中町	山瀬次右衛門	鎌倉	雪之下	大澤小平太
同	湯浅	橋本仙志津	下総	佐倉新町	関谷甚三郎
美濃	須賀村	今井田充右衛門	下野	塩屋郡矢板村	坂巻小左右衛門
尾張	津島	堀田源次郎	同	那須郡佐久山	白石 松立
			武蔵	八幡山	糟尾 利仲

八国に設けられた諸国産物取次所の二五人の人々である(表4)。この人々はどうのような身分・職業で、どのような縁でこの薬品会に参加したのだろうか。

まず、大坂までは戸田旭山が、京都までは直海元周と門人が産物を

集めてくれるとある。二人は前節で紹介した上方本草家の筆頭であり、江戸を含め相互に協力体制ができていたことを裏付ける。上方の産物取次所の人物は、大坂・京都の薬品会で見かけた氏名がつらなっている。

そのうち源内とも直接、面識があつただろうと推測されるのは、故郷讃岐の久保桑閑・三好喜右衛門の二人と、紀州和歌山の山瀬次右衛門・湯浅の橋本仙志津である。源内が高松藩主松平頼恭の命で宝暦一〇年に紀州の貝類の調査に行つたときの事跡をまとめた『紀州産物志』に「幸イ御国ニ而ハ湯浅橋本清七、御城山東田中町山瀬治左門ナド葉草モ少々見覚エリ候ヘハ」とある⁵⁾。

山瀬次右衛門：名を春政といい、かつて稻生若水に師事し、本草に詳しく梶取屋の屋号で和歌山に薬舗を開いていた。宝暦十年十一月に『鯨志』（二巻一冊）を著している、梶取屋（かんとりや）次右衛門である。『鯨志』は初めての鯨に関する本で、戸田斎・直海竜の序がある。

なお、河内中野村の重岡見昌、播磨明石の藤田養菴、摂津伊丹の武田三迪、美濃須賀村の今井田充右衛門らの名は、大坂の会に名を見つけることができる。越中北野村の逸見喜右衛門、南都の藤田七兵衛の二人は、直海元周の門人ではないかと思われる。

次に師匠田村元雄の人脈がある。信濃善光寺下町の青山仲庵は、『物類品隣』の校訂者に名を連ねている信濃青山茂恂ではないかと推測されている。田村一門の仲間であろうか。「信濃戸隠山地蔵谷産」の「至ッテ上品」な綿黄を出品している。近江山田の木内小半は『雲

根志』の作者木内石亭（小繁）で、源内より数年前に田村元雄に師事している同志であり、親しくしていた。長崎の斉藤丈右衛門・山本利源次は、長崎で薬種目利きを営んでいて、漢産・蛮産の珍しい植物を手に入れやすい立場であつた。宝暦八年に田村が九州に遊学していたから、そのときの縁であろうか。山本利源次は宝暦九年、田村に漢種の「使君子」（物類巻三草部使君子）を、東都薬品会に紅毛人から得た「多羅樹」の葉（物類巻四木部多羅）を出品している。そして伊豆北条四日町の鎮惣七は、直接、源内に会いに来た人物で、『物類品隣』芒消の段に紙面を割いてエピソードを書き残している。

このように、大坂では戸田旭山が、京都では直海元周、江戸では田村藍水というように、薬品会を通じて形成されたネットワークが、第五回東都薬品会には結集されている。三〇カ国から一三〇〇種という出品数は、一門・地域に関係なく、本草学という知識を共有するために張り巡らされたネットワークを物語る。

注

- (1) 松田泰代「史料から見た『物類品隣』出版経緯に関する一考察」『書物・出版と社会変容』五、二〇〇八年。
- (2) 藍水田村先生鑑定、讃岐平賀国倫編、東都田村元長・古河章輔・中川純亭同校（『平賀源内全集』所載）。
- (3) 戸田旭山「旭山先生文会録」（青木国男他編『江戸科学古典叢書45 博物学短編集』下、恒和出版、一九八二年、所載）。
- (4) 甲賀敬元鑑定・豊田養慶子禎編輯・平安文晶堂梓宝暦十一年刊（青木国男他編『江戸科学古典叢書45 博物学短編集』下、恒和出版、一九八二年所載）。
- (5) 平賀源内全集上『紀州産物志』一九五頁。

〔参考文献〕

- 齊藤忠『木内石亭』吉川弘文館、一九六二年
城福男『平賀源内の研究』創元社、一九七六年
芳賀徹『平賀源内』朝日新聞社、一九八一年
上野益三「博物学者平賀鳩溪（源内）」『ユリイカ』一九八八年
笠谷和比古『徳川吉宗』筑摩書房、一九九五年
大石学『教養の日本史 吉宗と享保の改革』改訂新版、東京堂出版、二〇〇一年

中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』新潮社、二〇〇〇年

磯野直秀『日本博物誌年表』平凡社、二〇〇二年

『平賀源内展』東京新聞、二〇〇三年

平賀源内『物類品隨』(『日本古典全集』昭和三年)

木内石亭『雲根志』上下(『日本古典全集』昭和五年)

平賀源内顕彰会『平賀源内全集』上・下、荻原屋文堂、昭和一〇年

戸田旭山『旭山先生文会録』(青木国男他編『江戸科学古典叢書四五 博物

学短編集』下、恒和出版、一九八二年)

豊田養慶『楮鞭餘録』(同上)

水田紀久・野口隆・有坂道子編『完本兼葭堂日記 木村兼葭堂全集別巻』

芸華書院、二〇〇二年

(付記)

本稿は、平成二二年一月に関西大学に提出した卒業論文を加筆・修正したものです。本稿の作成にあたり、藪田貫先生をはじめゼミの皆さまには大変お世話になりました。さらに改稿の際には様々なことから助言をいただきました。末筆ながら皆さまに心より御礼申し上げます。

(平成二〇年度卒業生・和泉市役所勤務)